

暑かった夏もようやく過ぎて、毎日のように「暑いですね」と交わした挨拶も、聞かれなくなりました。先日の猛暑の中、暑さを吹き飛ばすような「小さな夏祭り」が開催されました。

「そうめんを食べるぞー」「おおー！」と、祭りの始まりを告げるシュプレヒコールにより、流しそめんがスタート。さらに、夏の定番、かき氷を美味しく食べて、火照った体をクールダウン。お次は、スイカ割りタイム。なかなか割れないスイカと、お父さんの飛び入り参加に、大きな歓声が上がっていました。

そして、たねスタッフが汗をかきながら練習してきた、炭鉱節や、くまモン体操を全員で踊り、会場のテンションは最高にヒートアップ。元気な「きょうだい児」たちが、屋外でびしょ濡れになって水風船を当て合う、水遊び、へと発展。

また、少しまとまりとした人たち向けには、ブヌーズレン部屋（オランダ発祥の光・音・匂い・振動・触覚など、トータルリラクゼーションを目的と



スイカめがけてエイッ！！

夏の思い出

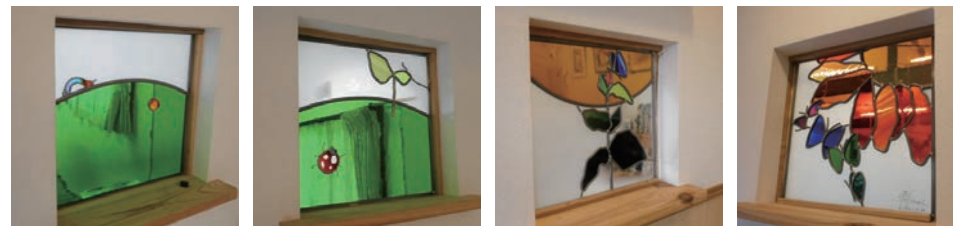
暑かった夏もようやく過ぎて、毎日のように「暑いですね」と交わした挨拶も、聞かれなくなりました。先日の猛暑の中、暑さを吹き飛ばすような「小さな夏祭り」が開催されました。

「そうめんを食べるぞー」「おおー！」と、祭りの始まりを告げるシュプレヒコールにより、流しそめんがスタート。さらに、夏の定番、かき氷を美味しく食べて、火照った体をクールダウン。お次は、スイカ割りタイム。なかなか割れないスイカと、お父さんの飛び入り参加に、大きな歓声が上がっていました。

そして、たねスタッフが汗をかきながら練習してきた、炭鉱節や、くまモン体操を全員で踊り、会場のテンションは最高にヒートアップ。元気な「きょうだい児」たちが、屋外でびしょ濡れになって水風船を当て合う、水遊び、へと発展。

また、少しまとまりとした人たち向けには、ブヌーズレン部屋（オランダ発祥の光・音・匂い・振動・触覚など、トータルリラクゼーションを目的と

所長 水野 英尚



小さなたねの物語が描かれたスタンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねスタッフのつぶやき

先日行われた「小さなたねの小さな夏祭り」は、いろんな企画があり、とても楽しいひと時でした。

その中には、本格的に青竹を切ったそめん流しがあり、
「流すよー」と所長さんが次々に流すソーメンに大人も子どもも、楽しくておいしくて、とても賑やかでした。

でも、終わった今もひとつ気がかりなことがあります。

「あれ、所長さんは流すソーメンを食べたのかな？」

流し役できっと食べていないはず……。
今もなぞのまま、聞けないでいます。

（保育士 東島明子）



医療法人にのさかクリニック

地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3

電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052

E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp



後記

以前、世界の出産事情を紹介する番組で、赤ん坊に深刻な病気が見つかり、今すぐ高額な治療費を払わなければ治療できず亡くなると、判断を迫られる親の姿があった。私の息子は日本だから生きられたし、便利な都会にいるから重度でも在宅が叶っているのだと思う。そのことへの感謝の横に、負い目、というのだろうか、そんな感情がどうしてもある。そして、そう感じる自分がとても嫌なのだ。相模原での卑劣で大バカ野郎な事件でまた、私は自分のドロドロ沼にはまってもがいている。（E）

「いのち」を肯定して生きる

「相模原障害者施設殺傷事件」から1カ月が経ち、これまで各団体や多くの方々が、この事件に対する怒りや悲しみ、戸惑いや社会に対する問いかけを発信しています。その言葉や文章等に、出来る限り目を通すよう心掛けてきました。

先日、電話で「今回の事件を受けて投稿してもらえませんか？ 締め切りは1週間後です」とキリスト教の出版社から依頼がありました。与えられた字数は800字（朝日新聞の「天声人語」より少し多いかな？）。書き始めてみると「これも語りたい」「このテーマも重要だ」と次々にこみ上げてきて、すぐ字数がオーバーしてしまいます。何とかまとめなければと考え、二つのテーマに絞ることにしました。

一つは「障害者は生きている意味がない」という、重い障がいのある人たちの「いのち」の全否定に対する応答です。そしてもう一つは、そのような「不幸」を抹殺することで、社会の「幸福」が得られると考える思想（優生思想）に、べつ向き合つのかということです。この二つの事

柄に対して、簡潔に伝えることが大切だと思います。

そこで、「いのちの否定」に対しては、当然「いのち」の肯定を語ること。他者と比較し、優劣を付け、一方を否定し他方を肯定するような生き方ではなく、「いのち」を肯定して生きる」人生があるということ。そしてそれは、「不幸」や「幸福」という物差しで計るようなことでなく、あるいは、他者がその人生を決めることもなく、「二つの人生」として受け止めていくこと、重い障がいを持ちながら生きる彼（女）たちこそが、その人生を生き抜いて、周囲の人たちにそれを指し示しているのだということです。

以下、今回投稿したコラムです。

*

「障害者は人間としてではなく、動物として生活を過ごしております。車イスに一生縛られている気の毒な利用者も多く存在し、保護者が絶縁状態にあることも珍しくありません。私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です」

（容疑者の手紙より）

▽相模原市「津久井やまゆり園」で起った殺傷事件の容疑者の目に、重い障害をもつ者は「生きるに値しない」いの



『たね cafe』1周年

昨年増築しました「たね cafe」が1周年を迎えました。試行錯誤の取り組みではありますが、毎週水・金（第3水曜日を除く）にオープンしています。

最近では、ランチを利用する子どもたちも増えてきました。さらに、地域のコミュニティスペースとして、近所の人やお母さんたちの憩いの場として発展していくことを願っています。

まだ行ったことがないという方は、ぜひ、どうぞ!!

営業時間：12時～15時

☆ランチ（週替わり） 500円

☆コーヒー&デザート 200円
（ランチとセットだと100円）

※数に限りがあります。



「看護師募集」のお知らせ

地域生活ケアセンター小さなたねでは、一緒に働いて下さる看護師を募集しています。

勤務形態・時間・希望曜日などをご相談に応じます。詳しいことをご存知になりたい方は、ご連絡下さい。





小さなたねの 小さな夏祭り

参加約40名で、夏祭りのひと時を楽しみました。今回は「熊本・大分地震」の支援募金を募り、手作りの「くまもん募金箱」には、12,026 円の募金が集まりました。ご協力感谢您いたします。支援金として、重症心身障害児者守る会熊本在宅部「たんぽぽの会」に送金いたしました。





残暑お見舞い申し上げます。

夏真っ只中ですね。たねを利用する方々も、定期の方に加え、就学中の子ども達も増えて、毎日とても賑やかになっています。今は、8月20日の夏祭りに向けて、くまモン体操を必死に覚えているところです。

夏休みになると、幼い頃のことをいつも思い出します。小学6年生の時ですが、夏休み中毎日ラジオ体操に参加するために、ラジオと印鑑を持参したことです。毎日目覚まし時計を準備して、「ちゃんと起きれるかな」と心配しつつ過ごしていました。その頃はリアルタイムでラジオをかけて6時30分から体操をしていたと思います。ラジオ体操のカードを首から下げて、終了したと同時に私達6年生を目掛けすごいスピードで並び始めます。朱肉を使っただけのはんこ押し、とても時間がかかる中でも、みんなでおしゃべりをしながらの楽しい一時でした。年長の子が幼い子達のお世話をすることや、責任感を持つことを学んできたように思います。

最近では、夏休みのラジオ体操を行う地域も減り、実施しているところであっても日数を減らしたり、時間を遅めに設定したりで進められています。「早朝から騒がしい」とクレームが入るため、神経を使うことが多くなったようです。自分達も地域の中で育ててもらったと思うので、多めに見て下さる大人が増えてくれたらと考えこのごろです。

みなさんも近所でのラジオ体操、覗いてみては如何ですか。

ラジオ体操



今村 玲子（看護師）

ち」と映りました。犯行の残忍さと自らを正当化する論理に対して、はらわたがえぐられる痛みを感じつつも、重い障害を持つ子の親として何とも言えない「不快感」を覚え続けています。この「ハイトクライム」（憎悪犯罪）は、一人の狂信者による犯罪であるだけでなく、その「憎悪」を生みだした社会的構造を露呈し、「むき出しの本性」が鋭利な刃物となり、私たちにも向けられたのだと考えています。

わが子に障害があると分かったとき、それは不幸な人生の始まりとしか受けとめられませんでした。そのように障害を否定し、障害を拒絶していた自分と、容疑者の「憎悪」とが繋がっていると感じてしまうところに、私の「不快感」はあるのでしょうか。人生を幸福か不幸かに選分け、一方を否定し他方を肯定すれば、不幸な人生には必ず「憎悪」が生まれます。しかし、それを「もう一つの人生」として肯定することができれば、「憎悪」を生むことはありません。わが子が懸命に生きる姿から、障害をもって生きることは不幸でもなく、また頑張って「幸福」にする必要もなく、全てをひっくるめて「いのち」を肯定する生き方をしていると教えられます。そんな障害を持つ彼ら・彼女らの「もう一つの人生」によって、どれ程多くの学びを頂い

ていることでしょうか。人々が「憎悪」から解放されるためには、その姿を一つの場所に集め、困いで括り、見えなくしてはなりません。地域の中で暮らし、生活の中で「いのち」の肯定の姿を見ることが必要です。全ての存在は、価値ある「いのち」を生きていることを使命としています。それを重い障害をもつ彼ら・彼女らから知らされるのです。

（『福音と世界10月号』新教出版社）

